

養鶏農協だより

—岡山県養鶏農業協同組合—

近県にまん延したと発表された 疑似ニューカッスル病の防疫対策

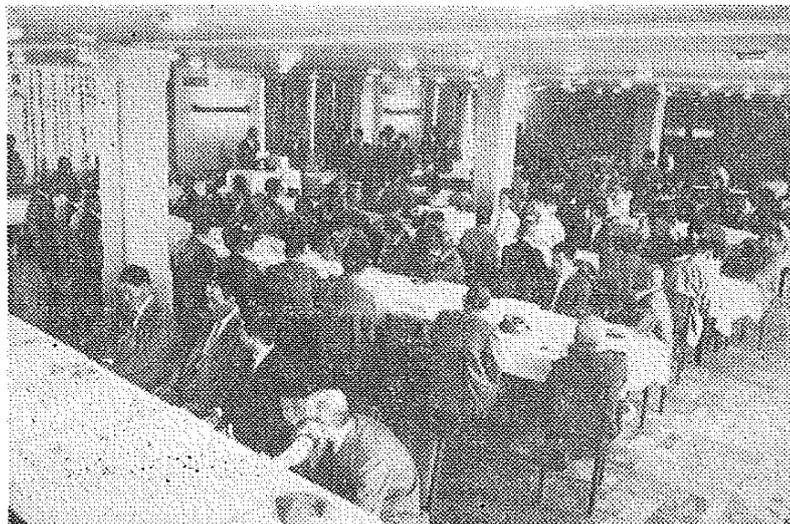
予防注射について

今春来香川、愛媛両県下に原因不明の鶏病が発生し、かなり大羽数に伝染しているとの情報がありましたので、組合では早速直営の全種鶏種雛にニューカッスル予防ワクチンの接種を実施しました。その後両県当局により、その鶏病を疑似ニューカッスル病と発表されたことはさきにお知らせした通りです。

その後の情報によると、両県とも発生地を中心として予防注射を実施すると共にその他の予防処置を講じた結果、ようやくまん延をくい止め、新たな発生はみられなくなったそうです。予防注射は香川県で40万羽、愛媛県60万羽に実施したそうですが、流行地優先配布のため入手困難であった予防ワクチンがようやく入手できるようになりました。ニューカッスル病は法定伝染病ですから、その予防注射も共済金支給の対象になりますが、左の理由により積極的には予防注射をおすすめしません。

- 1、ニューカッスル病のウィルスは高温に弱く、高温の季節には終息することが多いといわれています。
- 2、予防ワクチンの入手が容易といっても、恐らく7月にならないと入手できないでしょう。それでは、予防適期を外れることとなります。
- 3、高温季節に予防注射を行えば、注射のショックやストレスで犠牲鶏が出やすく、産卵にも悪影響があります。
- 4、ニューカッスル病は、地方によっては常在化したようであり、病徴も変って他の呼吸器疾患と誤解されることさえあります。だから、予防接種はむしろ年中行事とし、適期にそれが実施できるように予め予防ワクチン入手の方法を講じておくのがよいと思います。組合はそれに協力します。

写真は五月二十二日開催総会会場風景のスナップ



通常の衛生管理を特に厳重に励行

上述の通り、ニューカッスル病の病原ウィルスは国内に常在していると考えなければなりません。また、動物検疫関係の目が届かない冷凍チキンがかなり輸入されていますので、何時何処から病原ウィルスが侵入するか判りません。戦後はじめてこの病気が侵入したのは、米軍キャンプの冷凍チキンからであったといわれています。養鶏が零細な経営に過ぎなかった場合はそれほど問題にされなかった鶏の病気も、企業的な大規模な経営になったり、集団的に経営されるようになった現在では、鶏病は大問題であり、また伝染の機会も多くなったと考えなければなりません。特に近接地や、往来の多い地方に伝染病が発生したときは、日常の衛生管理を厳重に励行することが最も大切です。

- 1、外出用の衣服、履物等と鶏を管理する場合それとは明らかに区別し、管理用のは常に洗濯と消毒を怠らず、管理人自身の手や足を鶏舎へ入る度に消毒することを習慣づけること。
- 2、鶏舎内の清掃と消毒を常に行ない、鼠や野鳥、昆虫類をなるべく近づけないようにすること。
- 3、他人を鶏舎内に入れぬこと。特に食鳥業者、鶏卵業者、飼料運搬人等他の養鶏場と接触の多いも

岡山畜産便り 1964.06

のは絶対に鶏舎に近づけないこと。

4、伝染病流行地に近接した場所からは飼料、卵容器、器具類等を買わないこと。

5、万一伝染のおそれがある鶏病が少羽数でも出た場合は、直ちに組合へ通知してそのまん延を防止する処置の指導を受けること。

6、伝染病に対しては、常に警戒態勢にあること。

7、薬剤を乱用しないで、薬剤を投与する場合は組合の指導課と事前に相談すること。栄養剤でも同様な取扱いをすること。

8、常に鶏の観察を怠らず、健康保持に注意すること。